

「価値ある仕事」としての家事 —オランダ社会における専業主婦の主流化と周縁化をめぐって—

中谷文美（岡山大学）

「世界中に主婦はいるが、オランダほど歴史的に主婦の存在が大きいところはない。」（Kloek 2009:7）

1. はじめに

料理は、労働だろうか。

労働とは「体力を使ってはたらくこと」という辞書の定義に照らすなら、料理もまちがいなく労働である。

だが同じ料理という行為であっても、プロの料理人がレストランで客の注文に応じた調理をする場合と、家庭の主婦が家族の夕食の準備をする場合とでは、異なる性格を持つ。端的に異なるのは、その行為が経済的報酬に結びつくかどうかという点であるが、そればかりではない。料理人が基本的に料理という業務に専念する存在であるのに対し、主婦は、料理に限らず、掃除や洗濯、子どもの世話、さらに家計管理といった「家事」全般を担う存在である。

そもそも種々雑多な業務の集積である家事（オークレー 1980: 55）が一つのまとまりを持つものとして実践され、論じられる背景には、産業化以降の資本主義社会に特有の前提がある。それは、生産と消費の分離、そして家の外での男性の賃労働と家内での女性の無報酬の労働の間の分業である。たとえば、18世紀末までのヨーロッパについてドゥーデンが述べるように、時には血縁者以外の者も含む共同労働に依存した家族経済においては、生業と家事を切り分けることは困難であった（ドゥーデン 1998: 5）。今日であっても、家畜の乳を搾り、ヨーグルトやチーズに加工する牧畜社会の女性の営みは、放牧をする男性や小さい家畜の世話をすることもたちの労働と並んで、生きるための労働そのものであり、家事という別種のカテゴリーに収まることはない。だからこそ、料理や洗濯といった具体的な家事行為を示す言葉がある一方で、家事全般を一言で言い表す語彙を持たない社会は珍しくない。筆者の長年の調査地であるインドネシアのバリ島もその一つである。

つまり、家事とは産業社会の成立とともに生まれた概念であり、資本主義の進展が出現させた新たな「市場」と「家族」の関係において、市場によって商品化されず、家庭にとどまった労働を指す（Delphy 1984、上野 2009）。そしてその労働は、夫婦間の性別分業の下で、「主婦」という身分の既婚女性にゆだねられた。

したがって、家庭の主婦が無償で行う家事は、家庭の外で夫が従事する賃労働との対比の上に成り立つ。ここで「無償」であることが問題になるのは、そもそも労働とは交換価値を生み、経済的対価を支払われる人間の活動のことを指すと理解されてきたためである。1960年代以降のフェミニズムがくりかえし議論の俎上に載せてきた「家事も労働である」という主張は、家事を総体として可視化させ、無償＝不払いではあっても、価値ある労働であることを認めさせるためのものであった。

本稿が事例として取り上げるオランダは、冒頭の引用にもあるように、主婦がその文化を象徴する存在の一つ（Hofstede 1987: 6, Kloek 2009: 8）と言われてきた社会である。オランダ史上の黄金期とされる17世紀には、オランダ風俗画の代表的画家たちが、使用人とともに家事を切り盛りする

<特集論文>

主婦の姿を数多く残した。同時に、勤勉で過剰なまでにきれい好きで儉約家でもあるオランダ人主婦 (*Hollandse huisvrouw*) の姿は、外国人訪問者による具体的な記述からもうかがい知ることができる (Kloek 2009, Schama 1987, Sutton 1980)。主婦は法的には夫の庇護下に置かれていたが、日常生活では家長の妻として家政を任せられ、家内での役割遂行において夫と対等に並ぶ存在であったとされる (Kloek 2009)。

むろん、「家の女主人 (*vrouw de huizes*)」として使用人に家事労働を遂行させ、家政全般を管理・監督する主婦の存在は特定の階層に限られたものであり、庶民女性たちは夫ともども厳しい賃労働に従事し、家計を支えるほかなかった (van Deursen 1991)。

戸外就労せず家庭で家事に専念する主婦が、階層にかかわらず既婚女性の大半を占めるようになるのは、20世紀に入ってからのことである¹。20世紀前半には、教会勢力の伸長ともあいまって、稼ぎ手である夫と主婦である妻の役割分業が徹底して規範化され、既婚女性の就労は法律で規制されるまでになった²。

第2次世界大戦後の1950年代から1960年代前半にかけては、この「男性稼ぎ手モデル」がもっとも広く深く普及した時期である (Rademaker 2004: 30)。1960年時点での既婚女性の就労率は、2% (Morée & Schwegman 1981: 14) とも7% (Pott-Buter 1993: 190) ともいわれる。家事使用人のなり手が不足する中、この頃には圧倒的多数の既婚女性が専業主婦 (*huisvrouw van beroep*) として、自らの手で家事と育児を行っていた³。

しかし、その後はパートタイム就労を中心に女性の労働力化が進み、現在では、専業主婦女性は数の上で少数派である。主婦や家事の歴史を題材にした論文や書物は今も刊行され続けているが、それらは「失われた過去」への郷愁というトーンに彩られていることが多い (Brinkgreve 1998, Groffen & Hoitsma 2004, Kloek 2009, Oldenziel & Bouw 1998, van der Vlis 2007)。とりわけ女性のさらなる就労率拡大が重要な政治課題となっている近年は、高学歴でありながら家事・育児専業の道を選んだ女性を政治家が「人的資本の損失」呼ばわりするなど、何かと風当たりが強くなっている (中谷 2015: 153)。

本稿では、このように主婦の主流化と周縁化という歴史的経過を経てきたオランダ社会を題材に、とくに1950年代～60年代前半の、いわば主婦の全盛期を生きた女性たちとその娘世代にあたる女性たちの生活を比較する。主婦向けの家事手引書や生活時間調査、そしてインタビュー事例などを通じ、2世代の間に家事労働の担い手や評価をめぐって何が変わり、何が変わらなかったかを検討することがねらいである。そこで明らかになるのは、主婦という家事・育児専業者の存在を前提としなくなった社会において、無償労働とカテゴリー化される領域がどのような価値を持ち続け、誰によってどのように担われるかという問題をめぐっての一つのありうるべき道筋である。それは、有償労働と無償労働の間の区分を問い直すと同時に、無償労働の中の、完全には他者によって代替できないと判断される領域を自らの手で引き受ける「社会的権利」の確保につながっている。

2. 家事手引書に描かれる主婦像

1950年代の主婦が行っていた家事の具体的な中身を知る一つの手がかりは、当時大量に出回っていた家事手引書である。レシピや家事の方法を伝える手引書は古くから存在したが、とくに19世紀半ば以降は、技術の進歩や衛生観念の普及を背景に、体系化された知識を伝える手段としてのマニュアルが次々に刊行された (Oldenziel & Bouw 1998: 61-63)。こうした出版物は、1890年代以降、各地に創設された家政学校 (*huishoudschool*) での教育活動とともに、科学的根拠に基づく家事の合理化が強調された時代の産物で、執筆者の大半はそれらの学校で教鞭を取る家政学者であった (van

Daalen 1993: 11)。発売後まもなく版を重ねるものもあり、主婦の必携書として結婚祝の定番ともなっていた (Oldenziel & Bouw 1998: 61)。

これらの手引書には、掃除機の種類別機能の紹介など、家庭に普及し始めていたさまざまな家電製品の使い方から、動線に配慮した家具の配置、電球の取り替え方まで、実に具体的で多岐にわたる情報が盛り込まれている。

さらに、家事を効率的に進めるべきであるという観点から、一日単位の家事作業の段取りが見本として示されていることが多い。子どもの人数、年齢、住居の部屋数や間取り、経済階層、家事使用人や家電製品の有無といった詳細な設定を示した上で、起床から就寝までの家事労働の手順を、場合によっては分刻みで事細かに記している。

1950年代に出版されたいくつかの家事手引書を比較してみると、通いの女中など主婦以外の家事専門業者がいるかどうかによって、実際に主婦が担う作業の中身に違いはあるものの、全体の作業スケジュールにほとんど変わりはない。

掃除には、毎日決まってやる簡単な掃除と念入りな掃除 (*goede beurt*) の区別があり、後者は、一ヶ所ずつ順に行う、手間と時間をかけた掃除を指す。たとえば寝室の場合、毎日のルーティンとしてはベッドメイキング、片づけ、洗面台の掃除、家具の埃取り、掃除機かけをすればよいが、週に一回は寝具を外に干したり、カーテンにも掃除機をかけたり、窓を磨いたり、床をこすり洗ったりといった作業が必要となる (Mesdag *et al.* 1950: 66-67)。

全体として目につくのは、家事全体の中で、住居の清掃にまつわる行為が占める比率の高さである。上述のように、オランダではもともと17世紀の頃から、執拗なまでのきれいさの追求が主婦の代名詞とされてきた側面があり、当時出版されていた家政管理の手引書には、すでに曜日ごとの掃除の手順が記載されていた (Schama 1987: 375)。しかし、1950年代の主婦にとって、家の中は夫の職場同様、効率と合理性を重視すべき職場であり、家事はさらに系統だって、規則正しく進められるべきものであった (van Daalen 1993: 12)⁴。同時に、午前中には必ず一回、コーヒータイムが設定されるなど、過労に陥らないように、適度の休息も交えながら職務にあたる姿勢も重視された。

女中や掃除婦を雇うだけの余裕がある家庭の場合は、上記のような掃除作業の主な部分は有償家事労働者に任せ、主婦自身は、その都度判断が要求されるような家事 (御用聞きへの応対や下準備以外の料理など) を担う。だが、任せる作業の内容や相手の属性に応じた家事使用人のタイプ分け、平均賃金、休日の日数などといった雇用条件の細かい説明も、手引書には必ず掲載されていた。

実際にどの程度の比率で、個別の家事の遂行が主婦一人の手に任されていたのか、あるいは有償労働として従事する他者との共同作業であったのかを特定することはできない。ただ、洗濯業者などへの外注も含め、主婦の従事する家事が賃金の発生しうる労働であることは明確に意識されていたと言える⁵。その上で、すべき家事の内容と量を把握し、経済状況に応じて外注化の程度と頻度を決定するのも主婦の職務であった。

「崇高な職業 (*beroeparbeid van hoge orde*)」 (Mesdag *et al.* 1950: 10) とされる主婦の労働が、社会の他の職業と比較可能な位置づけにあるという認識は、たとえば150種類の職業従事者のエネルギー消費量を比較した調査にも示されている。この調査によれば、主婦の労働は事務職員や一般の工場労働者よりも重いものであった。この調査結果を紹介した家政学者は、これほどに重い主婦労働の軽減を図るためには、家事の効率をさらに高め、家電製品の活用などにより省力化を進めるべきであると主張していた (Prins-Visser 1952: 5)。

1950年代の主婦の日常—生活時間調査から

家事に実際に費やされる時間数を含め、主婦の生活実態を把握する試みとしては、1950年代から何度か繰り返された生活時間調査がある。ここでは、子どもを持つ専業主婦を対象とした1955年の生活時間調査の結果を紹介しておこう。

この調査では、2歳から15歳までの子が2人～4人いること、夫が年収6千ギルダー未満の賃労働者であることなどを条件に選定された専業主婦に対し、日記方式で2週間（5月と11月）にわたる生活時間の記録を依頼した（Wilzen-Bruins 1962）。集計にあたっては、具体的行動を住居の掃除、食事の準備、衣類の管理などの項目に分けた上で、それらをさらに3つのカテゴリーに統合した結果を示している。

表1 2～4人の子ども（2歳～15歳）を持つ主婦の平均生活時間

活動の種類	週当たりの時間・分
I. 家事	40時間15分
住居の掃除	14時間20分
食事の準備	12時間45分
食事の後片づけ	6時間25分
衣類の手入れ	6時間10分
その他(道具の修理、ペットの世話、庭の手入れなど)	35分
II. 気晴らしを兼ねた家事	22時間05分
家族の世話	7時間40分
裁縫	6時間30分
編み物	3時間45分
買い物	4時間10分
III. 家事以外の活動	105時間40分
睡眠/休息	59時間50分
身づくろいと食事	14時間45分
仕事中の休憩	1時間15分
趣味/娯楽	27時間55分
他人の世話(無償)	55分
他人の世話(有償)	50分
端数の切り上げ	10分

(出典：Wilzen-Bruins 1962: 24)

表1を見ると、費やす時間が長い家事は、「住居の掃除」、「食事の準備」、「家族の世話」（子どもの身の回りの世話から学校への送り迎え、遊びの相手や病人の看護までを含む）の順である。ただし掃除や料理が「家事 (*huishoudelijk werk*)」と分類されているのに対し、家族の世話は、裁縫、編み物、買い物などともに「気晴らしを兼ねた家事 (*huishoudelijk werk gemengd met ontspanning*)」というカテゴリーに入れられている。これら2つのタイプを合計した家事労働時間の平均は、週当たり62時間20分となる⁶。

報告書の結論部分では、週62時間余りという主婦の労働時間が、夫の職場での労働時間を上回ること、ただしそのうちの22時間分は気晴らしやリラクゼーションを伴う活動であることが指摘されている。服作り、編み物、買い物などが多少なりとも趣味的要素を含むものであり、さらに子どもの

世話も楽しみの範疇に入ると考えられていたことがわかる。このため、長時間に及ぶ主婦の労働は必ずしもつらく過重なものではないこと、また自己裁量権が大きい点で他の職業とは異なることも強調された (Wilzen-Bruins 1962: 61)。

居住地の環境、家の大きさ、子どもの数と年齢、所有する家電製品、家事使用人の有無などに加え、主婦自身のお好みや優先順位が家事の具体的な遂行に反映される余地はたしかにあったかもしれない。しかし、この生活時間調査の結果から同時に見えてくるのは、それらの違いを凌駕するほどの、平準化された家事遂行パターンである。

たとえば一週間を通じての大まかな流れを見ると、週の初めのほうで洗濯、続いてアイロンかけをまとめてやり、金曜には家じゅう念入りの掃除をして、土曜に買い物、といった伝統的パターン⁷が、広く踏襲されている。このような家事の週間スケジュールは、さまざまな属性の違いはあるにせよ、ほとんどの家庭が「すみずみまで掃除が行きとどき、きちんと片づいた家で家族は身なりを整えて日曜を迎えるという『オランダの理想』」(Wilzen-Bruins 1962: 25) を共有する前提の下に組み立てられていた。

時代は下るが、1979年に行われた、当時40歳未満の専業主婦へのインタビュー調査では、その女性たちが子どもだった頃、つまり1950年代の母たちの姿が次のように語られている (van Houten & Spaander 1980: 31)。

「私の母はいつも忙しく、何かをしていました。いつだってやることがあったし、いつも時間が足りなかったですから。」

「母は掃除に熱心で、働くことしか知らない感じでした。私たち子どもにかまってくれる時間はほとんどなかったですね。一週間のスケジュールがきっちり決まっていて、常に片づけたり磨いたりしていました。そうでないと、いい主婦にはなれなかったんです。」

当時の水準に見合う家事をこなすべく、主婦たちが働きづめだった様子がわかる。では、主婦たち自身はその状況をどうとらえていたのだろうか。

1964年、オランダの家電メーカーが全国の主婦2100人を対象に実施した生活時間調査で、「あなたは自分の仕事 (*werk*) を楽しんでますか」と尋ねたところ、「とても楽しんでいる」「やや楽しんでいる」という回答が全体の82%であったのに対し、「あまり楽しんでいない」と答えたのは3%、「ほとんど楽しんでいない」と答えた人はいなかった (Philips Nederland 1966: 63-66)。その理由として、「家がきれいできちんとしているのが好き」「喜んで家事をしている」など、家事そのものを好んでやっていると回答は、52%を占めていた。これらの結果は、主婦の本音というよりも、「やるべきことをやっている」という自負から来るものかもしれない。

それに対して、1979年時点のインタビュー調査で主婦たちが語る家事観は、戸外就労する既婚女性が周囲に増えつつある状況を反映している。主婦の仕事に対する認識も一様ではない。

「家をきれいにするのは好きだし、もちろん大事な仕事だと思います。夫に自分の仕事があるように、私ที่บ้านで仕事をするのは当然です」という答えがある一方で、「最近、主婦でいることに満足してはいけなそうと思われるようになってきている気がします。せめて短時間の仕事くらいしなうといけなうような」という声もある (van Houten & Spaander 1980: 113-114)。「前にしていた仕事に比べれば、主婦のほうがずっといいです。いつ、何をするか、自分のペースで決められるから」「(家事は)自分で選んだ以上、やらなければいけないこと」(ibid.: 93) といった語りからは、理念上、戸外の労働と家事

<特集論文>

労働が並置されることがあっても、現実には既婚女性が戸外就労を選択することはほぼあり得なかった50年代とは異なり、2つの領域の間の行き来が可能になりつつあった時代の変化がうかがえる⁸。

実際、主婦の再就職は1960年代を通じて、少しずつだが増え始めていた。労働力不足に直面した企業の中から、子どもの手が離れた既婚女性に対し、パートタイムの就労機会を提供する動きが出てきたのである (Portegijs *et al.* 2008: 22-23)。

同時に、ライフコースの選択や日常の生活様式が所属する教会や周囲の人の意見に大きく規定される状況はしだいに揺らぎを見せるようになり、世論自体も変化していった。1965年には、子どもを持つ女性の就労に反対する意見が84%を占めていたのに対し、1970年にはこれが44%に急減した (SCP 1998)。

やがて結婚や出産を理由に退職する女性の数も減り続け (Steenhof 2000)、今ではオランダは、EU加盟国の中でもっとも女性の就労率が高い国の一つとなった。未成年の子を持つ女性のうち、2011年時点で、72%が週12時間以上の労働に従事している (Merens *et al.* 2012: 56)⁹。子育て中の母親の中で、専業主婦は少数派に転落したのである。では、それまで主婦の労働として遂行されてきた家事には、どのような変化が起きたのだろうか。

コンビネーション・シナリオ——無償労働の再配分政策のゆくえ

女性の就労拡大に伴って、オランダ人の生活時間の配分は大きく変化したと言われる。女性が有償労働に割く時間が増えたことにより、純然たる家事に費やす時間数は、一貫して減少傾向にある。

女性の家事時間の減少は、すでに1970年代から始まっていた (Portegijs *et al.* 2006: 102)。だが、職場での有償労働と家庭での無償労働の両方に従事する人が男女ともに主流化する社会の到来は、1990年代後半に本格化した (van den Broek & Breedveld 2004: 39)¹⁰。その状況をもたらした最大の要因は、言うまでもなく女性就労率の拡大であるが、そのほかにも、1990年代半ばに進んだ店舗の営業時間や労働時間をめぐる規制緩和が背景にあると言われる。

さらに当時の政策の動向を示す重要な手がかりは、国の社会経済政策の策定に多大な影響力を持つ諮問機関、社会経済審議会が1996年6月に出した答申、「無償労働の将来シナリオ (Advies toekomstscenario's onbetaalde arbeid)」である (SER 1996)。これは、有償労働の大半が男性によって、無償労働の大半が女性によって担われている現状を変え、男女が有償労働と無償労働をともに担う近未来を実現するための具体的方針と、それに付随する政策パッケージを提示したものである¹¹。ここで言う無償労働とは、「家庭、子ども、自立できない老人、病人、障害者に対するケア」を指している。

この答申に先立って招集された「無償労働の再配分に関する将来シナリオ委員会」は、4種類のシナリオを検討した結果、「コンビネーション・シナリオ (combinatiescenario)」がもっとも望ましいと結論づけ、社会経済審議会もその結論を追認した。

コンビネーション・シナリオとは、労働時間の柔軟化、経済・社会保障制度の変更、ケア供給の拡大、ケア労働の外注化の促進などといった一連の政策の導入により、労働市場への女性の参入を促す一方、労働時間の短縮が男性の家庭責任遂行を可能にする状況をめざすものである。ただし、ケア労働の全面的外部化は「オランダの文化にそぐわない」 (SER 1996: 16) という理由で、子どものいる世帯では、夫婦の両方がパートタイム契約 (週当たり29～32時間程度) で働くことが望ましいとした。

このコンビネーション・シナリオは、次の2つの点において画期的であった。一つは、ジェンダー平等の視点から、男性稼ぎ手モデルを積極的に修正する方向に舵を切ったことである。言い換えれば、このシナリオでは男性稼ぎ手と対の存在であった専業主婦を周縁化し、既婚女性の就労を前提とする

社会制度への転換を公に打ち出したことになる。もう一つは、無償労働に従事する時間を男女両方が確保するために、労働時間の短縮が不可欠という見解を示したことである。

とはいえ、その後のオランダ社会が、全面的にこのシナリオ通りになったわけではない。たとえば、夫婦両方がパートタイム契約で働くカップルの比率は、過去20年で増加傾向にあるとはいえ、まだ6%前後にすぎない¹²。

しかし重要なのは、提示された政策パッケージのうち、公的保育の充実や労働時間の柔軟化、パートタイム労働とフルタイム労働の均等処遇化などが次々に施策化され、結果として、従来とは異なるワークスタイルが社会全体に定着したことである（中谷 2015: 55）。

フルタイムとの均等処遇を保証された上でのパートタイム勤務は、女性にとってはもはや定型的な働き方となっており、独身女性の間にも広がりつつある。他方、フルタイム契約を維持している男性であっても、一日当たりの勤務時間を増やして出勤日を週4日に圧縮することが認められている。子どもが8歳になるまで取得できる育児休暇を活用して週当たり労働時間を減らし、やはり週4日勤務を実現するという働き方も可能である。このような勤務形態を選択する男性の中には、現在の職業を学業や趣味と両立させる人もいるが、大半は、週末以外の日を家で子どもと過ごすために使っている。筆者のインタビュー対象者¹³の中でも、平日に夫婦が一日ずつ子どもの世話をすることで、子どもが保育所や学童保育に通う日数を週3日以内に制限しているケースが非常に多かった。

では、コンビネーション・シナリオで想定されたような、女性は有償労働へ、男性は無償労働へという「相互乗り入れ」は、どの程度実現したのであろうか。

家事はどこへ？——「1・5稼ぎ」時代の家事と育児

夫婦間の役割分業のあり方は、たしかに時代とともに変わってきた。その変化は、オランダで5年ごとに行われてきた生活時間調査の結果にも現れている¹⁴。

表2 家事時間の経年変化（0～17歳の子どものいる世帯、1980～2005年）

	1980	1985	1990	1995	2000	2005
全体	19.1	20.0	18.9	18.8	17.7	16.8
女性	32.0	31.3	29.4	27.7	24.9	24.1
有職女性	24.2	23.5	24.1	21.0	21.3	20.4
主婦	33.1	33.5	32.3	31.5	28.9	29.0
男性	6.8	8.1	7.7	9.2	9.6	9.4
					(週当たり時間数)	

出典：Bucx 2011 の表 5.6(p113) をもとに作成

注：「家事」には食事の準備、後片付け、掃除、衣類のケア（洗濯、アイロンかけ、繕い）、買い物がふくまれる。

表3 育児時間の経年変化（0～17歳の子どものいる世帯、1980～2005年）

	1980	1985	1990	1995	2000	2005
全体	6.2	6.9	7.2	8.0	8.9	10.1
女性	9.1	10.0	10.4	11.3	11.9	13.9
有職女性	5.8	7.4	6.3	8.7	8.5	11.5
主婦	10.0	10.8	11.8	12.7	14.7	16.0
男性	3.3	3.6	3.8	4.3	5.4	6.3
					（週当たり時間数）	

出典：Bucx 2011 の表 5.1 (p104-105) をもとに作成

注：「育児」には子どもの身の回りの世話、遊び相手、読み聞かせ、宿題の手伝い、その他の家族の看護がふくまれる。

表2と表3は、18歳未満の子を持つ男女が、家事と育児に割く週当たり平均時間数の推移を示したものである。

まず、男性が家事に費やす時間が増加した一方で、女性の家事時間が週8時間も減少していることが注目される。内訳を見ると、料理と後片付けに女性が割く時間は1980年の14時間から2005年の9時間へと5時間分も少なくなった。家の掃除に充てる時間は2・4時間の減少である。これに対し、男性の料理・後片付け時間は1・1時間、掃除時間は0・8時間増えている（Bucx 2011: 114-115）。

とはいえ、男女の比率で言えば、女性の家事負担が依然として大きいままである。また、女性の家事時間が減少した分を補うほど男性の家事時間が増えたわけではないため、全体として、子どもを持つオランダ人が家事に割く時間は減っていることになる。

他方、表3から明らかなように、育児時間は男女ともに増加した。働いている女性や男性も、1980年に比べて2倍の時間を育児に費やしている。比率はやはり、女性7に対して男性3くらいだが、育児の中でも、食事や着替えといった身体的な世話ではなく、本の読み聞かせや外遊び、散歩という形で子どもの相手をする時間に注目すると、母親3・7時間に対し、父親が2・4時間となり、男女差はかなり少なくなる（Bucx 2011: 106）¹⁵。

経済的に余裕のある世帯であれば、週一回、数時間単位で通いの家政婦を雇うことにより、家事労働に充てる時間の不足を補う手立てもある。筆者のインタビュー対象者の大半は、子どもを週4日以上保育所に預けることには強い抵抗を感じていても、家政婦の雇入れや半加工食品を活用する形の家事の外注化には、まったく違和感を持っていなかった。また、夫婦が家事にかかる時間の長さを同じにするよりも、料理が好きで掃除が苦手な妻は、毎日食事を作る代わりに夫に掃除を任せたり、掃除好きの妻は料理の手抜きをしたり、半加工食品を活用するなど、それぞれの志向と生活の実情に合わせて納得のいくやり方を模索していた。

夫婦がともに「仕事と家庭の両立」を実現するために転職を繰り返し、より望ましい働き方を模索してきたカップルの場合、家事についても試行錯誤があったことを次のように語っていた。

「今は2人が五分五分で（家事を）やっていますが、そこにたどり着くまでにはいろいろありました。前は私がいつも食事を作っていましたが、そのうち夫が料理好きだということがわかって、今は彼が料理して、私が後片づけをします。掃除は週に5時間、家事手伝いの人に来て、家じゅうをきれいにしてくれます。私は掃除が嫌いだけど、家の中が汚れているのもいや。だから人を雇うことにしたんです。

友人の家を見ていると、結局は妻のほうがちょっと多く家事をする羽目になっています。でもそれは友人たちも認めている通り、自分が正しいと思うやり方にこだわりがあるからです。(中略) 結局のところ、たいいていの女性たちは、家事を自分に引き寄せてしまっているんじゃないでしょうか。今の世代の男性たちは、機会さえ与えられれば、家事をする気があるはずですから。』¹⁶

たしかにオランダの場合、「家事を平等に分担すべき」という発想そのものは重視されても、現実それが実現していないことについては、男女ともにそれほど問題視していないという指摘がある (Bucx 2011: 119)。全体としては一部外注化を図りながら、家事の水準を下げることで、家事時間を減少させてきた (Tijdens 2000: 11)¹⁷。したがって、他のヨーロッパ諸国に比べて男性の家事時間の増え幅が小さいにもかかわらず、現状の分担状況に対する女性の満足度は相対的に高いという (Portegijs *et al.* 2006)。

夫の積極的な関与が必要と考えられるようになったのは、むしろ育児の領域である。子育て世帯の大半が「1・5 稼ぎタイプ」である以上、家にいる時間は妻のほうが多くなる。だが相対的に少ない時間でも、夫が家にいられるときには、家事より育児を率先して行う傾向があることは、すでに紹介した生活時間調査の結果からも読みとれる¹⁸。

育児専業者でもあった専業主婦の存在が珍しくなった現在も、育児については、公的保育の利用を週2～3日程度にとどめるケースが多い。夫婦や子どもの祖父母を含む拡大家族が協力体制を組むことで、家庭内での養育を確保しようとしている。子どもは週末を含めて週4日以上、家庭で過ごすことが望ましいという価値観が広く共有される中、動員可能なケアの担い手の状況を勘案しつつ、保育所に行かせる日と自宅で父母のどちらかが世話をする日、祖父母が半日あるいは一日単位で面倒を見てくれる日、場合によっては近所の人に預かってもらう日など、複雑に組み合わせられた週単位のケア・スケジュールがどこの家庭にも必ずある。したがって、育児の担い手はもはや母親だけに限定されるものではなくはなっているが、母親たちがフルタイムではなくパートタイム勤務を選択する最大の理由は、今なお育児責任なのである (中谷 2012: 76)。

さらに、インタビューの過程で繰り返し指摘されたもう一つの点は、夫が積極的に育児にかかわるようになったとはいえ、子どもたちに対するケア・スケジュールの調整や誰かの誕生日にお祝いのカードやプレゼントを用意するといった役目を担うのが、依然として妻の側だということである。たとえば朝、子どもを保育所に連れて行くのは夫の役割でも、前の晩に着ていく洋服や持ち物をすべてそろえておくのは妻であったり、一週間の間、誰がいつどこにいるかを完全に把握しているのは妻だけで、夫は言われたとおりに子どもの送り迎えをしたり、用意されたプレゼントを持って行くだけだという声を頻繁に聞いた。つまり、実際にどちらがどれだけ家事に費やすかという問題よりも、「段取り」(*organiseren*) の責任を負うのがどちらかという問題こそが重要だと言うのである。

家政学者のファン・ハウテンとスパーンダー (van Houten & Spaander 1980: 22) は、専業主婦たちに対するインタビュー調査をもとに、主婦の家事労働が、(A) 掃除、炊事、洗濯といった具体的な家事行為、(B) 何をすべきかの判断と段取り、(C) 子どもの世話、病人の看護など家族へのケア、の3種類に類別できると述べる。

かつて既婚女性の大半を占めていた専業主婦にとっては、これらすべてが果たすべき職務であり、とりわけ (A) の遂行が重みを持っていたことはすでに見たとおりである。しかし、今のオランダにおいて、誰がどのように担うべきかをめぐって社会の関心が集まり、当事者にとっても常に課題として意識されているのは、(C) である。コンビネーション・シナリオで再配分をめざすべき対象となったのも、主としてこれらの労働であった。

<特集論文>

しかし現代の既婚女性の多くは、(A)を一部外注化し(通いの家政婦雇用、加工・半加工食品の購入、窓ふき業者の利用など)、(C)を夫婦と拡大家族を含むネットワークでカバーしている。その一方で、(B)にあたる家庭生活の段取りの部分が今なお妻たちによって遂行されているということになるが、彼女たちがそれを重荷に感じ、積極的に手放そうとしているようには見えなかった。夫婦がともに有償労働に従事し、育児を中心とする無償労働も分かち合いながらスムーズな家庭生活を送る上で、家族のスケジュール管理やベビーシッターの手配、拡大家族ネットワークの維持といった内容を含む「段取り」は、その成否を握る要となる役割である¹⁹。現代オランダ女性の多くは、フルタイムとの均等処遇を保証されたパートタイム勤務に従事する一方で、「価値ある仕事」としての無償労働を遂行する時間を確保する選択権を行使しているとも言える。

3. おわりに

17世紀のオランダ風俗画を分析した著作の中で、ツヴェタン・トドロフは、当時の「家の女主人」としての主婦が、同時代の他社会の女性に比べ、相対的に高い地位を与えられていたと考えられる理由を次のように述べた。「あらゆる仕事が社会にとって同じ価値を持っているわけではないのだが、同じ尊厳を備えていることはありうる。それこそが、当時のオランダ社会の秘密であるように思える」(トドロフ 2002: 40-41)。

17世紀オランダにおいて、家内空間がその外部の公的世界と区別され、なおかつ道徳的に優越するとみなされていたという解釈は、複数の論者によって喧伝されると同時に、反論も招いた(Franits 1993, Schama 1987, cf. de Mare 2006)。だがここで重要なのは、主婦が采配をふるった家内空間に一定の価値が付与され、そのことが主婦の「仕事」である家政の管理・監督に、トドロフの言う「尊厳」を与えたと考えられる点である。

ただし、トドロフは続けてこうも言っている。「尊厳は、主体が自分自身で宣言することはできず、社会的コンセンサスによってしか与えられない。そのコンセンサスが消滅すると、あらゆる領域を一本化する経済的価値が幅を利かせ、ただひとつの尺度にそってさまざまな種類の仕事を並べられる。すると商人の仕事が、主婦の仕事より高く評価されることになる。一本化は不平等を緩和しないで、それを際立たせるのだ」(トドロフ 2002: 41)と。

かつてスーザン・ヒメルワイトが、無償労働という「名づけ」をめぐって危惧を表明したのもまさにこの点であった。家庭内で主婦が行なってきたタダ働きの家事を「労働」カテゴリーに引き入れることで、従来の労働概念に備わる特性が家事労働の評価に反映されることになった。その皮肉な結果として、「機会費用の発生」、「分業の一部を構成する」「誰がやってもかまわない」といった労働の特性になじみやすい行為は市場化が進み、家庭内で行われる頻度が減少する一方で、行為者とその行為の対象の関係性が意味を持つケアの営みは不可視のまま家庭内にとどまり、なおかつ低い価値を付与され続けるという事態が生じた(Himmelweit 1995: 9-10)。

オランダの、1950年代の家事手引書で「崇高な職業」と賞揚される主婦の職場たる家庭は、たしかに夫の職場と意識的に並置され、後者の論理や属性が持ち込まれる場でもあった。しかし、その時点では性別に基づく分業が堅持され、2つの異なるタイプの労働の間の行き来は想定されていなかった。また、主婦の労働と夫の労働は、一つの尺度によって測られるものというより、対置されつつ、それぞれに尊厳を備えたものとみなされていたと言える。

その後、1970年代、80年代を通じて女性の就労意欲は増大し、他方、労働市場の構造的変化を背景として、既婚女性の再就職や結婚・出産後の就業継続が広がっていった。

1990年代以降は、他国の男女平等政策の展開の中とも歩調を合わせる形で、男性稼ぎ手モデルに基づく制度設計が見直され、さらに男女間での有償労働と無償労働の偏った配分を是正することが重要な政策課題と認識された。その背景にある要因の一つが、女性の労働力拡大を必要とする市場の要請であることは否めない。とくに政府にとっての重要課題は、女性の就労率が上昇したのちも多くの女性がパートタイム契約にとどまっている事態の改善であった。そして、ケアを重要視するオランダの社会的コンセンサスをないがしろにせず女性の労働参加を加速するという命題への取り組みが、コンビネーション・シナリオのもとに無償労働の再配分をすすめる政策に結びついたのである。この過程で、かつては子どもの相手をする暇もないほど主婦たちが追われていた家事実務については、「誰がやってもかまわない」労働となりつつあり、外注化が進むとともに、そうした労働に特化する存在としての専業主婦は周縁化されている。他方、ケアにまつわる活動は、無償ではあっても有償労働の劣位に置かれるものではなく、別の価値を有するものとして、既婚男女の生活に重要な位置を占め続けている。ケアと、そしてそのケアの供給をめぐる「段取り」、いわば家庭生活のマネージメントにあたる領域は、労働／非労働のどちらでもなく、「価値ある仕事」としての認知を得、だからこそ女性たちはその領域への関与を積極的に手離そうとしていないとも言えるのではないだろうか。

注

- 1 都市と農村の違い、あるいは階層により変化のスピードは異なったが、19世紀から20世紀初頭にかけて専業主婦の比率はどの階層でも増え続け、1910～22年には、低級管理職や低級専門職、熟練労働者、土地持ち農民などを夫とする女性の8～9割が結婚後、無職となっていた (van Poppel *et al.* 2009)。この間に広まった専業主婦規範に従う形で、実際には夫の収入だけでは家計が支えられない階層の女性も戸外就労を放棄したため、工場よりも劣悪な条件で内職に従事したり (van Poppel *et al.* 2009)、近隣世帯の洗濯やアイロンかけを請け負うなどで家内で働いた (Morée & Schwegman 1981:11)。
- 2 1904年の勅令を皮切りに、公務員職の女性に結婚退職を義務づける法律が次々に制定された。1937年の、家事サービスを除くすべての職種で既婚女性の雇用を禁じる法案は国会を通過しなかったが、民間企業においても、結婚・出産退職はすでに慣行化されていた。未婚女性に対しても就労規制の動きが何度も出されており、この結果、1990年代に入るまで、周辺諸国に比べてオランダ人女性の就業率は著しく低かった (Henkens *et al.* 1993:332, Pott-Buter 1993:155, 248-250)。結婚や妊娠を理由とする女性の解雇を禁じる法律が成立したのは、1973年である (Andeweg & Irwin 2005: 198)。
- 3 19世紀末までの間、下層女性の主要な職業の1つは女中業であった。通いの女中も含めると、1899年には就労登録した女性の半数が家事労働に就いていた。20世紀に入ると工場や事務所、店舗などでの雇用機会が広がり、とりわけ戦後は女中のなり手が激減した (Morée & Schwegman 1981:67-68)。この結果、家事使用人を雇用する世帯は、1947年には7%、1960年には4%未満に過ぎなかったという (Tijdens 2000: 10)。
- 4 こうした考え方は、1920年代から30年代を通じて普及したものであった (Morée & Schwegman 1981:62)。たとえば、1920年代にドイツで版を重ねていた手引書をオランダの実情に合わせて翻案した『新しい家事』では、台所仕事を効率的に進めると同時に主婦の疲労を軽減するために照明の位置や動線、身長に合わせたシンクの高さなどを工夫することから、主婦の「仕事着 (beroepskleeding)」としてふさわしい服装に至るまで、通常の職場で重視される事柄をそのまま持ち込んだと思われる発想が満載されている (Meyer 1929)。原著者であるエルナ・マイヤーの思想や同時代のドイツにおける家政学をめぐっては、藤原 (2016) を参照。
- 5 他人のためにすれば賃金が発生するような妻の労働に対し、夫が報酬を払うことはないが、妻の正しい家計管理があってこそ、夫がもたらす収入は家族の十分な支えとなる、つまり、どちらの果たす役割がより重要であるかを決定することはできないという記述もある (Mesdag *et al.* 1950: 10-11)。
- 6 1951年にオランダ主婦協会 (De Nederlandse Vereniging voor Huisvrouwen) が実施した生活時間調査では、3人の子を持つ世帯の場合、平均家事時間が1日あたり14・5時間という結果も出ている (Prins-Visser 1952:7)。
- 7 月曜日に洗濯、火曜日にアイロンかけ、水曜日につくろい物、といった日替わりの家事スケジュールは、少なくとも19世紀以降、ヨーロッパと北米で広く共有されていた。
- 8 家事遂行のパターンについても、日替わりや週替わりのスケジュールにこだわらない人や、料理だけは必ずするが、やる気が起これなければ掃除や洗濯は後回しにする、といった形で、家事の水準が画一的でなくなりつつある状況が見て取れる (van Houten & Spaander 1980: 53-59)。
- 9 20歳～65歳の女性全体に占める就労者の割合は64%であるが、オランダの労働統計は、週12時間未満の就労者を含まないため、国際比較統計では異なる数字が用いられる。
- 10 14歳未満の子を持つ親の中で、有償労働と無償労働それぞれに週12時間以上従事する人の割合は、男女とも56%に上る (Breedveld *et al.* 2006: 24)。
- 11 1975年～1990年の生活時間調査によって、無償労働の7割は女性、3割は男性によって担われており、有償労働の分担比率はちょうどその逆となるという現状が確認された。これを踏まえ、「男女間の有償・無償労働を再配分し、他方では、無償ケアから有償ケアへの転換を促進することによって女性の労働参加を推進する」ための方策が検討された (SER 1996)。
- 12 15～64歳の法律婚および事実婚カップルのうち、両方の就労形態がパートタイムである割合。2010年のオランダ

<特集論文>

- ダ中央統計局のオンラインデータによる (中谷 2015: 41)。
- 13 筆者は 2005 年から 2011 年にかけて、オランダにおけるワーク・ライフ・バランスの実践をめぐる、子育て中の男女を中心とする計 50 人に対してインタビュー調査を実施した。この調査の詳細と、結果に基づく分析については、中谷 (2015) を参照のこと。
 - 14 オランダで 1975 年に始まった生活時間調査は、全国の 2000 人を対象に、10 月第 2 週の 7 日間、あらかじめ定められた活動項目について 15 分刻みの日誌をつけてもらうという方式で、5 年ごとに実施されてきた。この方式での最終実施は 2005 年である。2011 年からは、国際比較を可能にするため、ヨーロッパ統計局の主導による新たな測定方式を採用した調査が行われている (Cloin 2012: 13-14)。
 - 15 ヨーロッパ 15 カ国の生活時間を比較した 2006 年の調査によれば、18 歳未満の子を持つオランダ人男性の育児時間は 1 日あたり 49 分で、北欧諸国をふくむ 15 ヶ国の中でもっとも長い。ところがオランダ人男性 (20 ~ 74 歳) が家事に費やす時間のほうは 1 日あたり 1 時間 47 分と、イタリア、スペイン、ラトビアに次いで短く、15 ヶ国平均の 2 時間 4 分をかなり下回る。それでも日本の既婚男性の 1 日あたりの平均家事時間 (平成 18 年度社会生活基本調査によれば 30 分) よりははるかに長い。
 - 16 アンヌマリー (仮名)、2008 年 3 月 13 日のインタビュー。
 - 17 トルコ人の移民女性に対する調査では、トルコ人はもともと几帳面で、結婚を契機とするオランダへの移住当初は掃除に非常に手をかけていたが、今では、オランダ人の隣人たちがそこまで掃除にこだわっていない様子を見て、自分も手を抜くようになったという語りを紹介している。この語りを引き出したオランダ人の女性人類学者は、「きれい好き」もまた「オランダ的」であったはずだがとコメントしている (van der Horst 2008: 70)。
 - 18 女性の多くは「ながら家事」で個別の家事労働と子どもとの世話を同時に遂行するのに対し、男性はどちらか 1 方しかできないという傾向 (Bucx 2011: 112) も、結果として男性の家事時間の少なさを生みだしていると言えるかもしれない。
 - 19 インド都市中間層の既婚女性が従事する家事について分析した押川 (2012: 107) は、子供の教育と高齢者のケアが「精神的・心理的な気配りと判断、関係する他者との折衝と調整など」を要する仕事であるが故に重要視され、主婦としてのアイデンティティの中核にあることを指摘している。

参考文献

- 上野千鶴子 2009 『家父長制と資本制』岩波書店。
- オークレー、アン 1980 『家事の社会学』(渡辺潤・佐藤和枝訳) 松籟社。
- 押川文子 2012 「インド都市中間層における『主婦』と家事」落合恵美子・赤枝香奈子編『アジア女性と親密性の労働』京都大学出版会、81 - 110。
- 竹中恵美子 2011 『社会政策とジェンダー』竹中恵美子著作集 V、明石書店。
- トドロフ、ツヴェタン 2002 『日常礼賛—フェルメールの時代のオランダ風俗画』(塚本昌則訳) 白水社。
- ドゥーデン、バーバラ 1998 「資本主義と家事労働の起源」B. ドゥーデン、C.v. ヴェールホーフ『家事労働と資本主義』(丸山真人訳) 岩波書店、1 - 47。
- 中谷文美 2012 「主婦の仕事・母の仕事——オランダ社会における家事の文化とその変容」落合恵美子・赤枝香奈子編『アジア女性と親密性の労働』京都大学出版会、55 - 80。
- 中谷文美 2015 『オランダ流ワーク・ライフ・バランス—「人生のラッシュアワーを生き抜く人々の技法」世界思想社。
- 藤原辰史 2016 『ナチスのキッチン——「食べること」の環境史』共和国。
- Andeweg, Rudy B. and G. A. Irwin 2005 *Governance and politics of the Netherlands*, Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- ラフマン、ジョン 2012 「家庭は至福の場か—17 世紀オランダ風俗画における家族と家庭のイメージ」(深谷訓子訳) 中村俊春編『絵画と私的世界の表象』京都大学学術出版会、89 - 118。
- Brinkgreve, Clara 1998 *Beroep huisvrouw : 100 jaar huisvrouwenleven in de grote stad*, Amsterdam: Amsterdams Historisch Museum.
- Bucx, Freek ed. 2011 *Gezinsrapport 2011: Een portret van het gezinsleven in Nederland*, The Hague: SCP.
- Delphy, Christine 1984 *Close to home: A materialist analysis of women's oppression*, (trans. by Diana Leonard), Amherst: The University of Massachusetts Press.
- Franits, Wayne E. 1993 *Paragons of virtue: Women and domesticity in Seventeenth-Century Dutch art*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Groffen, Mayke and Sjouk Hoitsma 2004 *Het geluk van de huisvrouw*, Amsterdam: Sun.
- Henkens, K., A. Meijer and J. Siegers 1993 "The labour supply of married and cohabiting women in the Netherlands, 1981-1989," *European Journal of Population* 9: 331-352.
- Himmelweit, Susan 1995 "The discovery of "unpaid work": The social consequences of the expansion of 'work' ," *Feminist Economics* 1 (2): 1-19.
- Hofstede, Geert 1987 *Gevolgen van het Nederlanderschap*, Rede Rijksuniversiteit Limburg.
- Houten, Marja van and Gerda Spaander 1980 *Beroep huisvrouw*, Wageningen: De Uitbuut.
- Kloek, Els 2009 *Vrouw des huizes: een cultuurgeschiedenis van de Hollandse huisvrouw*, Amsterdam: Balans.
- Merens, Ans, Marijke Hartgers and Marion van den Brakel eds 2012 *Emancipatiemonitor 2012*, The Hague: SCP.
- Mesdag, E. et al. ca.1950 *De huisvrouw binnen en buiten haar huis*, Rotterdam: Nijgh & Van Ditmar.
- Meyer, Erna 1929 *De Nieuwe huishouding*, Amsterdam: van Holkema & Warendorf's.

- Moreé, Majolein and Marjan Schwegman 1981 *Vrouwenarbeid in Nederland, 1870-1940*, Rijswijk: Elmar.
- Oldenziel, Ruth and Carolien Bouw eds, 1998 *Schoon genoeg: huisvrouwen en huishoudtechnologie in Nederland 1898-1998*, Nijmegen: SUN.
- Portegijs, Wil, B. Hermans and V. Lalta eds, 2006 *Emancipatiemonitor 2006*, The Hague: SCP, CBS.
- Pott-Buter, Henriette Ali 1993 *Facts and fairy tales about female labor, family, and fertility*, Amsterdam: Amsterdam University Press.
- Portegijs, Wil, Marielle Cloin, Saskia Keuzenkamp, Ans Merens and Eefje Steenvoorden 2008 *Verdeelde tijd: Waarom vrouwen in deeltijd werken*, The Hague: SCP.
- Prins-Visser, C. W. Willinge 1952 *De arbeid van de huisvrouw*, Wageningen: H. Veenman & Zonen.
- Rademaker, Vera 2004 "Het eeuwig vrouwelijke: Vrouwelijkeheid in de jaren vijftig volgens Margriet", *Aanzet (Historisch Tijdschrift)* 21 (3): 28-54.
- Sayer, Liana C. 2010 "Trends in housework," in Judith Treas and Sonja Drobnic eds, *Dividing the domestic: Men, women, and household work in cross-national perspective*, Stanford: Stanford University Press, pp.19-38.
- Schama, Simon 1987 *The embarrassment of riches: An interpretation of Dutch culture in the Golden Age*, New York: HarperCollins.
- SCP (Sociaal en Cultureel Planbureau) 1998 *Sociaal en cultureel rapport 1998: 25 jaar sociale verandering*, Rijswijk: SCP.
- SER (Sociaal Economische Raad) 1996 Advies toekomstscenario's onbetaald arbeid.
- Steenhof, Liesbeth 2000 *Werkende moeders*, Index No.5, pp26-27, The Hague: CBS.
- Sutton, Peter C. 1980 *Pieter de Hooch, Complete edition*, Oxford: Phaidon.
- Tijdens, Kea 2000 *Employment, family and community activities: A new balance for men and women, The case of the Netherlands, a report for European Foundation for the Improvements of Living and Working Conditions.*
- van Daalen, Rineke 1993 "Van 'lekker schoon' tot 'schoon genoeg': Veranderingen in de schoonmaak van het privé-huis," *Huishoudstudies* 3 (3): 10-19.
- van den Broek, Andries and Koen Breedveld eds 2004 *Trends in time: The use and organization of time in the Netherlands, 1975-2000*, The Hague: SCP.
- van der Horst, Hilje 2008 *The materiality of belonging: The domestic interiors of Turkish migrants and their descendants in the Netherlands*, Doctoral dissertation, Universiteit van Amsterdam.
- van der Vlis, Ingrid 2007 *In Holland staat een huis: Honderd jaar huishoudelijk werk*, Schiedam: Scriptum.
- van Deursen, A. TH. 1991 *Plain lives in a Golden Age: Popular culture, religion and society in seventeenth-century Holland*, Cambridge: Cambridge University Press.
- van Poppel, Frans W. A., Hendrik P. van Dalen and Evelien Walhout 2009 "Diffusion of a social norm: Tracing the emergence of the housewife in the Netherlands, 1812-1922", *Economic History Review* 62 (1): 99-127.
- Wilzen-Bruins, E. J. 1962 *Wat doet de huisvrouw met haar tijd?: Een bewerking van en rapport over een onderzoek naar de tijdsbesteding van enkele groepen Nederlandse huisvrouwen*, Groningen: J. B. Wolters.